

【レヴィナス協会第7回大会シンポジウム「出版 50 周年記念『存在するとは別の仕方、あるいは存在することの彼方へ』のアクチュアリティー」】

(発表要旨)

ラプス・デュ・タン (Laps du temps)

Juste guerre, être ensemble, arhythmie, au-dessus des eaux, éon, se, copule, ...

合田正人

「翻訳する」とはどういう過程なのだろうか。それは、この宇宙をなす数限りない変換の謂であり、私たちが通常「翻訳」と呼んでいるものは、それらの変換がまとう一つの様相にすぎない。けれども、それはどこかで、総体とすら呼べない変換の総体とつながっている。かつてアランは、身体の真の故郷は宇宙全体であると語ったことがあるが、翻訳する時に感じる名状し難い身体的ねじれの感覚もそれを物語っているのかもしれない。「砂嵐」(ギイ・プチドマンジュ)とも形容されたこの書物は、ほかでもない「翻訳」＝「裏切り」を語るものなのだが、それだけにより一層、*Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* の翻訳、そしてその再翻訳はこの感覚を嫌というほど味わせてくれるものだった。イブ・クラインの Hiroshima を表紙とした初版が朝日出版社から出版されてから 35 年、この感覚は今も続いている。そのなかで、何ともやりきれない思いが兆すことも少なくない。同書に何度か記されている *éon* という語はまさにこの身体に刺さった刺のごときものと言わねばならないだろう。というのも、私は当初 *éon* が何を意味するのか分からないまま、それを「アイオーン」と取り違えて初版を世に問い、*éon* の何たるかを後に知ってから、その途方もない含意について最近まで気づくことがなかったからだ。それを私に教えてくれたのは、ライナー・シュールマン(1941-1993)の *Le principe d'anarchie* (Editions du Seuil, 1982) であった。今回の発表では、*éon* の重要性に訳者が気づくまでの経緯を、シュールマンの議論にも言及しながら語ったうえで、パルメニデスの造語とも言われるこの語についてハイデガーが「アナクシマン드로スの箴言」「モイラ」『思考とは何の謂か』などで何を語っているのか、レヴィナスが *Autrement qu'être* でどのように *éon* を使用したのかを提示し、そこに立ち現れてくる、単に差異とも類似とも呼ぶことのできない不可思議な境位を指し示すことをめざした。ハイデガーによれば、*éon* は *éon* というギリシャ語に、また「分詞」なるものに翻訳され裏切られざるをえない「かのもの」であり、また「二重襲」の底無しの深遠であって、その意味では、まさに「ギリシャ人たちが語らなかった原理＝始原をギリシャ語で語る」というレヴィナスの営為に呼応するものであり、*au-delà de l'essence (esse, ousia)* を示唆するものではないだろうか。同書第二章に付されたハイデガーをめぐる不可思議な脚註はこのことにレヴィナスがどこかで気づいていたことを告げているのではないだろうか。このような起爆剤を内に抱え込んだまま、*Autrement qu'être* は今も訳者たる私を強迫し続けている<sup>2)</sup>。

註

1) 本発表後、2025 年 5 月 28 日-31 日にかけてローマ大学哲学科で開催された *Autrement qu'être* を

めぐる国際シンポジウムで、発表者〔合田〕は *éon* を主題とした研究発表を行なったが、参加者のほぼ全員が *éon* を「アイオーン」と読んでいることが判明した。シェリングの *Weltaler* における「アイオーン」との連関を勘案すべき、との極めて重要な指摘がジェラルド・ベンスーサン氏によってなされもした。数名の参加者が、*éon* が「エオン」である可能性に賛意を示してくれたというのが、本発表の主題をめぐる偽らざる状況である。

2) 本発表は、*éon* はハイデガーにとってもレヴィナスにとっても「繫辞（コプラ）とカテゴリーからなるアリストテレス的論理学」への抵抗を示している、との視点を発表者に与えてくれた。この視点から、現在、両哲学者の読解を進めているところである。